

氏名(本籍)	あか え たつ や 赤江達也(岡山県)		
学位の種類	博士(社会学)		
学位記番号	博甲第3605号		
学位授与年月日	平成17年3月25日		
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当		
審査研究科	社会科学研究科		
学位論文題目	〈日本—キリスト教〉の近代 —近代日本における「宗教と社会」の歴史社会学的研究—		
主査	筑波大学教授	博士(社会学)	菱山謙二
副査	筑波大学教授	博士(社会学)	若林幹夫
副査	筑波大学講師		葛山泰央
副査	東京大学教授		内田隆三

### 論文の内容の要旨

本論文は、導入部をなす序章、先行研究の検討と方法論の提示が行われる第一章、日本とキリスト教の関係を思考する枠組みが社会的に構成されてゆく過程を歴史社会学的に分析する第二章、内村鑑三と無教会キリスト教の成立を対象に、近代日本における個人、宗教、社会、国家の関係を分析する第三章、矢内原忠雄の戦中期の言動を主対象に、戦中期日本におけるキリスト教と近代天皇制の独特の関係づけの構図を分析する第四章、日本における宗教と社会の関係とそれをめぐる言説の構造に関する本論文全体の結論を提示する終章から構成されている。

「課題と構成」と題された序章では、ファシズムとキリスト教の「対決の記念碑」とも称される矢内原忠雄の舌禍事件を手がかりに、日本キリスト教とそれをめぐる言説の問題が考察され、本論文の課題と構成が示される。

「方法：「宗教と社会」言説の歴史社会学」と題された第一章では、先行研究として大塚久雄や丸山真男等の戦後を代表する社会学者たちの日本キリスト教をめぐる議論や、日本キリスト教史における日本とキリスト教の関係づけの構図が検討され、戦後社会学やキリスト教史における日本とキリスト教の関係を捉え方を相対化しつつ、その関係を分析する本論文の方法論的立場として歴史社会学と言説分析が提示される。

「〈日本とキリスト教〉という問題の成立まで」と題された第二章では、それまで不安定だった「宗教と社会」をめぐる言説の場が1890年代に次第に安定した秩序を形成し、〈日本とキリスト教〉という問題が成立してゆく過程が、1870年代のプロテスタント改宗者たちの結社、1880年代半ばのキリスト教国教化論、1890前後の帝国憲法をはじめとする法制度の整備等を対象として検討される。そして、日本とキリスト教の関係をめぐる言説では〈日本〉と〈キリスト教〉が「対立」的であると同時に調停可能なものとしても考えられるという二重性があることと、〈日本〉と〈キリスト教〉が〈公的なもの＝政治社会(国家)〉と〈私的なもの＝個人の内面〉という領域区分と緩やかに重なりあうかたちで基本的な関係性のパターンを形成したことが示される。

「個人の宗教／個人の社会—明治近代とキリスト教—」と題された第三章では、内村鑑三のいわゆる「不

敬事件」とその後の無教会キリスト教の成立を対象に、キリスト教をめぐる当時の社会状況や無教会主義に内在していた宗教観や教会論が分析され、無教会キリスト教の当初の構想が分析される。まず内村の「不敬事件」が、国家的な儀礼のなかでキリスト教徒が自らの「身体」と「心」をどのように調停するかをめぐる「戸惑い」の産物であったことや、この事件に関する論争を通じて日本とキリスト教の関係が、国体と宗教・信仰の関係をめぐる問題の構図として実定性を帯びていったことが示される。さらに、そうした問題の構図のなかで日本キリスト教界が教派ごとの教会へと発展的に分裂し、それら諸教派が徐々に「国体」の内部に自らを位置づけていくなかで、雑誌というメディアに媒介された〈紙上の教会〉として無教会キリスト教が構想されたこと、したがって無教会とは、一般に考えられているように教会を否定し、信仰の「個人的・内面的」性格を強調する「個人主義」的なものであったわけではなく、少なくともその当初は、新たな教会を構想する関係論的な思想であったことが示される。そして、にもかかわらず日本キリスト教史の言説が、無教会主義を「個人の宗教」としてのプロテスタント・キリスト教の典型であり、日本における近代的個人確立の契機となりうるものとして表象してきたと論じられる。

「宗教としての社会－近代天皇制とキリスト教－」と題された第四章では、矢内原忠雄の戦時下の言説が検討され、無教会主義的な個人こそが「真の」全体主義の担い手たりえ、無教会主義の「たましい」によってこそ臣民と皇室は融解しようと矢内原が論じていたこと、そこでは〈日本とキリスト教〉という問題が〈個人と社会〉の完全な調和としてほとんど「最終解決」されていたことが示される。さらに、戦後において矢内原の言説や無教会主義を「全体主義」的な国家に対する「内面的」な「抵抗」として表象してきた、戦後のキリスト教史や社会思想史の言説の構造が分析される。

「宗教と社会」の日本近代」と題された終章では、以上の分析から明治以降に成立した日本とキリスト教の関係をめぐる問題の構図には、「個人の内面」がなければ「真の近代化」は実現されず、それには「宗教」とりわけキリスト教が有効なはずであるという強迫的な観念と、「社会」なるものの本質は「宗教的なもの」だという想定があったことが論じられ、そうした思考の枠組みは日本近代における「宗教と社会」に関する言説と想像力の外延を指し示していると結論される。

## 審 査 の 結 果 の 要 旨

本論文が、歴史社会学と言説分析という実証的な方法を用い、日本社会とキリスト教の関係や無教会キリスト教に関して、従来のキリスト教史や戦後社会科学とは異なる分析と理解を説得力をもって示したことは、高く評価される。また、日本キリスト教史の言説や日本における教会の組織原理に対して、言説分析やメディア論の視点から新たな知見を提示したことも評価に値する。近世から近代への移行とキリスト教信者の属する階級・階層の変化といった社会構造上の問題の考慮や、先行する理論研究の理解、実証的なデータの量などでさらなる充実が望まれるが、それらは本論文の価値を損なうほどのものではない。

よって、著者は博士（社会学）の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。